■経済部
TEL…078-362-7094
FAX…078-360-5511
e-mail…keizai@kobe-np.co.jp

トップは語る
地域経済の中で
商工会編

郡内での連携に活路

平崎 泰彦氏（70）
播磨町商工会長

ひらさき・やすひこ　加古川東高、神戸商科大（現兵庫県立大）卒。76年NEC。77年に父が設立した平崎会計事務所に入り、83年税理士登録。19年播磨町商工会長。趣味はゴルフと旅行。播磨町出身、在住。

―播磨町の面積は9・13平方キロと、兵庫県内市町で最も狭い。商工業の特徴は。

「約50年前に造成された人工島の新島が町の面積の3割を占める。ここには川崎重工業や神戸製鋼所など約50社が工場を構え、大手の協力業者を含めて200以上の事業者が活動する。製造業が基幹産業なのだが、商工会の会員542事業所の8割は商業、サービス業が占めている」

―課題は。

「東隣の明石市と西隣の加古川市には、それぞれ播磨町との境界近くにスーパーを核とした大型量販店がある。町内にはないのだが、挟まれる形となり、この30年間で小規模な飲食、小売業は大きく減った。特産品がないのも長年の課題だ。タコやアナゴの好漁場があるものの、ブランド化となると明石のタコや高砂のアナゴにはかなわない」

―解決に向けた商工会の取り組みは。

「約10年前から特産品づくりに取り組んできたが本年度、行政と連携してふるさと納税の返礼品をつくるプロジェクトを始めた。4社、7アイテムの採用を目指している」

―地域経済を盛り上げる方策は。

「小さな町だけでの対応には限界があり、広域化が鍵だ。まず加古郡内の播磨、稲美両町長、両商工会の正副会長が議論する場を2022年8月につくった。隣町同士だが、これまではお互い独立主義でやってきた。不定期だが年に3回開き、商工業振興の具体策を進める。商工会と町、但陽信用金庫の3者が連携し、独自の低利融資制度も検討している。新産業の台頭に期待する」（聞き手・高見雄樹）